

## 2. 郷土のために<sup>つく</sup>尽した人びと

○ 一生を人のため、世のために<sup>つく</sup>尽した人〔瓜生岩子〕

江戸時代も終わりに近いころ（1829年）、瓜生岩子は示現寺の前にあった母親の実家（生まれた家）の山形屋で生まれました。その後、9才になるまで小田付村（現在喜多方市になっている）で成長しました。父が急病で亡くなり、家も火事になって燃えてしまい、岩子は母といっしょに山形屋へひきとられました。示現寺のお坊さんからは、「自分の命を大切にし、ひとの命も大切に」ということを教えられました。



14才になると、若松のおばさんの家で礼儀作法、<sup>れいぎ さほう</sup> 学問、<sup>がくもん</sup> さいほうの勉強をしました。その後、結婚して4人の子どもの母親になり、各家庭をまわってあきないをする呉服商<sup>ごふくしょう</sup>としてがんばりました。しかし、若くして主人を病気で亡くし、母親も亡くなって岩子は生きる<sup>きりよく</sup>気力をなくしてしまいました。33才頃のことでした。そこで、岩子は示現寺のお坊さんに相談をしました。お坊さんから「お前のこれからのすべてをもっと不幸な人にささげるのだ。お前は他人の喜びを自分の喜びにできる人間だ。」と強く教えられました。岩子は、人につくすことに生きがいを見つけ、以前にも<sup>ま</sup>増していっしょうけんめいに働き、人のため、世のために努力するようになりました。

1868年の会津藩の戦争（<sup>あいづはん</sup> 戊辰戦争）<sup>ぼしんせんそう</sup>）では、若松の町々に官軍が攻<sup>かんぐん</sup> せ